

医師を目指す 原点を大切にしながら 心臓外科医として 挑戦を続けた日々



須磨スクエアクリニック院長
心臓外科医

須磨 久善氏

THE NIKKEI MAGAZINE Education

医学部受験特集

— 問われる医師への覚悟 —

CONTENTS

- 03 巻頭インタビュー
須磨スクエアクリニック院長 心臓外科医
須磨 久善氏
- 06 CLOSEUP 医学部に強い塾・予備校
Y-SAPIX
メビオXYMS
- 13 医学部受験 最新入試動向
医学部受験を目指す中高生に必要な力とは
- 14 イベント情報
医学部受験 予備校合同相談会

日経マガジン エデュケーション 広告特集
企画・制作＝日本経済新聞社

デザイン・構成／広真アト
取材・文／cubic、橋崎明子、仲谷宏（拓文社）
撮影／仙崎田延（帝國写真）

プレゼント
本特集に関するアンケートにお答えいた
だいた方の中から、抽選で図書カード
2,000円分を10名様にプレゼントします。
★詳しくは14ページへ

胃大網動脈を使った心臓バイパス手術に世界で初めて成功し、日本初のバチスタ手術も成功させるなど、心臓外科医として数々の偉業を成し遂げてきた心臓外科医の須磨久善氏。その後も日本で初めて心臓の専門病院ハートセンターを立ち上げるなど、日本の医療の発展に大きく寄与している。医師を目指したきっかけも含め、これまでの歩みを振り返ってもらった。

**中学のときに真剣に将来を考え
“幸せ”になるために医師を志望**

—— 中高時代は、どのよう
な生活を送っていましたか。

家族には一人も医者がおらず、医者の働く姿に触れることもなかったため、子どもの頃は将来の選択肢の中に医者は入っていませんでした。小学校の先生は、親に灘中学の受験を薦めてくれたようですが、当時の灘中学は丸刈りで、それが嫌で（笑）、甲南中学に入學しました。普通に勉強していれば大学までストレートに上がれる学校だったため、中高時代は本当に伸び伸びとした生活を送ることができました。

—— 進路のことを真剣に考え始
めたのはいつごろですか。

中学3年くらいでした。高校受験も大学受験もない学校でしたから、どの学部に進むかという話になりました。学部を選択するには、その先の仕事を考えなければなりません。そこで、どんな仕事をしたのかを真剣に考えました。自分の部屋に閉じこもって空想に耽ることが好きだったこともあり、一人でじっくりと考えました。仕事を選ぶには、「何のために」その仕事をするのが大切ですね。ですから、「自分はこうなったらうれしいのか」という問いをずっと考え続けていました。いつも堂々巡りなのですが、あるときか「幸せに



イタリアで開催された国際シンポジウムで、自身のバチスタ手術の成果と新しく考案した手術法を講演。



1ミリメートルの血管をつなぎ合わせる冠動脈バイパス手術。正確な縫合を行うために拡大鏡を使用して執刀する。

なりたいたい」と思いました。そして、子ども心に、幸せにはう通りあると考えました。誰よりも強くて、自分のほしいものを何でも手に入れられる幸せと、自分と出会ったことで、その人に喜んでもらえる幸せがあると。自分の性格から考えて、明らかに後者でした。ちょうどテレビで「ベン・ケーシー」という医師のドラマをやっていたこともあり、医師なら助けた人に喜んでもらえて、自分が幸せになれると、腑（ふ）に落ちたのです。

——具体的な受験勉強を始めたのはいつですか。

医者になるとは決めたものの、高3の夏までは、推薦で進学することが決まっている友人たちと遊び回っていました。しかし、夏が終わってからは部屋の雨戸を締め切り、親にも一切関わらないでくれと頼み、夢中で勉強しました。塾に行かず情報もないため、自分で教科ごとに重要なことを取捨選択しながらの勉強でした。もともと私の中には医学部以外に進学するという「プランB」はありませんでした。しかも浪人もしたくありませんでした。「こじかない」と退路を絶ったことで、踏ん張りが効いたのだと思います。

アメリカ帰りの教授の影響で心臓外科医としての活躍を夢見た

——いろいろな診療科があるなかで、なぜ心臓外科を志望したのですか。

「ベン・ケーシー」の影響もあり、最初から「医者＝外科医」というイメージでした。そして、アメリカで心臓外科を学んできた教授に話を聞いていたうちに、心臓の手術ができる医者になればいいと思うようになり、心臓外科医には特別な才能が必要なのではないかと悩みました。でもやらずに諦めるよりも、自分がどこまでできるか挑戦してみようと思いい、最終学年のとき、その教授に「卒業後は先生のところに入局します」と意思表示をしました。

——卒業後すぐに心臓外科医としてのキャリアが始まったのですか。

私の人生は土壇場でコロッと変わります。卒業を控えた秋ころ、なぜか「このまま関西という、狭い地域で一生を終えることは絶対いやだ」と思ったのです。すぐにでもアメリカに渡りたかったのですが、まずは東京に出ようと、当時からアメリカカナイズされた初期研修システムを導入していた虎の門病院の外科レジデントに応募したのです。虎の門病院から合格通知が来て母校の教授の許しを得て、上京しました。

——心臓外科医としてキャリアはいつから始まったのでしょうか。

母校からユタ大学に留学し、帰国した35歳のときからです。すでに日本でもバイパス手術が行われていたが、母校の教授から「アメリカで学んできた最新の成果を生かして、バイパス手術のチームを作り、チーフとして成果を出すように」と言われたのです。当時のバイパス手術は足の静脈を使うことが一般的でした。しかし静脈を高圧の動脈系に利用することがアメリカで疑問視され始めていたときに留学したため、帰国後はどこかの動脈を使えないかと模索しました。このとき、虎の門病院時代での一般外科の修行が生きたのです。

——新しい手術をする機会は、いつごろ訪れたのでしょうか。

通常の患者さんに未知の血管を使うわけにはいきません。この方法しかないという患者さんを待っていました。すると半年ほどして、静脈を初回手術で全部使って再手術が必要な患者さんがあらわれたのです。教授のゴーサインを得て、世界で初めて胃大網動脈を使ったバイパス手術を行い、成功させることができました。

——反響はいかがでしたか。

日米での学会発表の後、新聞やテレビでの取材が相次ぎました。手術も1年目の40例から翌年には80例と倍増し、4年目には100例を超えていました。世界的にもこの方法への関心が高まり、1991年には、ベルギー・ブリュッセルのルーベン大学の公開手術に呼ばれました。3日間連日手術を行い、すべて成功しました。その後、公開手術や講演の依頼、手術の指導依頼などが殺到し、10年間で40カ国くらい回りまわった。海外での手術は500例くらい経験していますが、すべて成功しています。

心臓外科医の次のステップとして日本初のバチスタ手術を執刀

——その後、イタリアのローマカトリック大学の心臓外科に教授として招かれます。



毎年全国各地から須磨氏との対話を求めて中高生が代官山を訪れる。修学旅行中に広島から会いに来た学生たちと、真剣に医療や人生についてディスカッション。

イタリア最大で最も伝統ある大学から教授として教えてほしいと依頼されたのです。ローマに住んでイタリア各地やモナコなどの病院で手術をしていたところ、ヨーロッパの学会ではパチスタ手術の話題で持ち切りでした。バイパス手術は心臓が元気で、血管が詰まっている人を治す手術ですが、パチスタ手術は悪くなった心臓そのものを治す手術です。私たちは考案者のいるブラジルの病院に医局員を派遣して調べました。極度の心不全患者に当時脳死が認められていない日本では心臓移植はできません。ですから、パチスタ手術は日本にこそ必要な手術だと考えました。

——それで、ローマから日本に戻ることになるわけですね。

帰国する際も煩悶(はんもん)の日々が続きました。ローマは居心地が良く、家を買って定住しようと考えていたからです。しかし、日本にパチスタ手術が導入される場合、もし失敗すると執刀医の技術ではなく、手術そのものの完成度が疑われる可能性がありました。そうになると、日本ではパチスタ手術は行われなくなり、それを外国で何もせずに見ているだけの自分は許せません。そこである日突然、「日本に帰る」と。やはり、土壇場でのどんでん返しです(笑)。

——日本にパチスタ手術ができる環境はあったのですか。

パチスタ手術は日本では話題にもなっていないでし、当然患者

さんが待っていたわけではありませぬ。しかし、将来的には心臓の専門病院であるハートセンターをつくりたいと思っていましたし、そういった環境を作れる可能性を求めて、湘南鎌倉総合病院に勤務することになりました。すると、まもなく大学病院から最初の患者さんが紹介されてきました。失敗するわけにはいきませんが、ヨーロッパとアメリカでそれぞれ初めてパチスタ手術をした心臓外科の世界的な権威3人に声をかけ、日本で初めてのパチスタ手術を手伝ってもらうことにしました。残念ながら、患者さんは肺炎を併発して亡くなりますが、パチスタ手術で心臓の収縮が改善することは確認できて、その後8人連続で成功させることができました。厚生労働省は異例の速さでパチスタ手術の保険適用を認められ、その後、葉山に念願のハートセンターを開院しました。

**医師に必要な資質は「思いやり」
一人で自問自答する時間が大切**

——医師を続けていく上で大切なものはなんでしょうか。

医師になろうと思った原点だと思います。医師は全ての患者を助けられるわけではありませぬし、亡くなる人をたくさん見る仕事です。ですから必ずどこかの段階で、自分か医師に向いているのか、続けられるのか疑問を持つようになります。そんなときに原点さえはつきりしていれば、乗り越えることができます。

そうした原点づくりのため、葉山ハートセンターでは手術の様子を子どもたちに見せました。私の院長在任中に3000人あまりの小・中高の学生たちが見学に来ました。

——医師を目指す中高生にメッセージをいただけますか。

最も大切なのは「責任感」です。手術だからたまには亡くなることもあるという意識ではなく、自分が関わった患者さんは何がなんでも助けるという意識が絶対に必要です。もう一つは「クリエイティブティ」です。医療の進歩は一人ひとりの医師の「どうしたら目の前の患者さんを助けられるようになるか」というイマジネーションと、それを具現化するクリエイティブティに支えられているからです。

——医師を目指す中高生にメッセージをいただけますか。



須磨 久善 (すまひさよし)

Profile

1950年、兵庫県生まれ。甲南中学校・高等学校出身。74年大阪医科大学卒業。虎の門病院外科レジデントを経て、78年順天堂大学胸外科、82年大阪医科大学胸外科、米國ユタ大学への留学後、86年青大駒形を併った心臓バイパス手術に世界で初めて成功。84年ローマカトリック大学心臓外科教授、96年に帰国し、湘南鎌倉総合病院副院長として日本初のパチスタ手術を成功させる。2000年葉山ハートセンターを設立し院長に就任。財団法人心臓血管研究所スーパーバイザーを経て、12年須磨ハートクリニックを開院。17年より現職。